

『世界を変えよう基金』ボランティア活動報告書

筑波大学国際総合学類 遠山里菜

渡航先：ケニア（ナイロビ、エンブ、ニャフルル）

滞在先：アフリカ児童教育基金 ACEF <http://acef-jpn.com/>

ケニアリーグ サッカークラブ グリフォン FC

<https://football-kenya.com/japanese-fc-owner-in-kenya/>

<https://griffon-fc.com/>

渡航期間：2018/02/27~2018/03/15

●渡航の目的：

今回の渡航の目的は、主に二つある。一つは、開発支援の現場を実際に自分の目で見ることである。私は将来、途上国での開発支援に関わる仕事がしたいと考えている。将来どういった立場で開発支援に関わりたいのか考えるためである。二つ目は、単純に現地の人のために何か行動したいと考えたからである。授業でいくら開発について学んでも、いくら NGO 団体に寄付しても、現地の人のためになっている、ということを実感するのは難しい。実際に現地で人々と触れ合って支援を行い、今までどこか他人事として関わっていた世界問題に自分事として取り組みたいと感じ、今回の渡航を決めた。

●現地での実際の活動

—ACEF での活動—

ACEF では、現地の孤児院、現地の小学校を訪れ、日本文化を披露し、異文化体験を提供するというので、現地で三味線を披露した。また、おもちゃがなくても遊べるような、日本の手遊び等も教え、子供たちとの交流を深めた。他に小学校で行われた運動会の運営の手伝いも行った。運動会は、子供たちのためになることはもちろん、子供たちの親や近所の住民が集まるような地域交流の場を生み出したことに意味があると感じた。また、自分の経験として、ケニアの結納式にケータリングサービスを提供する側として参加し、またそこでも三味線を披露した。ケニア人の食文化や冠婚の儀式等を学ぶことが出来た。アフリカで 2 番目に大きいと言われ、約 100 万人が生活しているキベラスラムというところも訪れた。今までの私のスラムのイメージが覆り、なぜ私たちが支援する必要があるのか、考えるきっかけを得られた。

—グリフォン FC での活動—

このサッカークラブは、ケニアのニャフルルという町を拠点に日本人のオーナーが運営し

ており、人材育成×サッカーの国際協力を行っている団体である。ここでは、グリフォン FC の日々の練習に参加し、グラウンドのゴミ拾いや、写真撮影を主に行ってきた。他にも、グリフォン FC の打ち合わせでケニアの刑務所に同行したり、市長から表彰を受けるということで、カメラマンとして同行したり、現地の貧しい人々が多く通うパブリックスクールで現地の教育について先生にインタビューした。

● ボランティアの成果

目に見える変化として成果が挙げられたのは、グリフォン FC でのゴミ拾いである。グリフォン FC はただサッカーをするのに十分な広さがあるというだけのスタジアムで練習を行っており、グラウンドは荒れていた。ケニア人はゴミをゴミ箱に入れるという習慣がないのか、そこら中に食べたゴミやなんやらが落ちている状態である。私はサッカーを教えることはできないので、選手が練習している間はゴミ拾いを始めた。私が参加した練習 5~6 回あった中で、ほぼ毎回ゴミ拾いをしていた。最初はみんな遠巻きに見ているだけだったが、ある時から練習に来ていた選手の子供が手伝ってくれるようになった。そこから、練習を見ていた子供たちがどんどん集まり、私と子供達でゴミ拾いをするようになった。私が帰国した後、また荒れ始めたグラウンドを、日本人スタッフが何も言わなかったのにも関わらず、ケニア人選手たちが自主的にグラウンド清掃を始めたと聞いた。規模は小さいが、グラウンドは自分たちで綺麗にし、ゴミはゴミ箱に捨てるという習慣を残すことが出来たのではないかと感じた。

また、目的に対しての成果としては、様々な国際協力の場で働く人々と話す機会を得られました。国連職員の方を始め、ボランティア団体の方、ケニアで起業した方など、多くの方と話し、国際協力の方法や今後自分がどんな方法で開発に携わりたいのか、新たな視点が得られました。もともと国連に興味があったのですが、今回でさらに目標にしたいところが明確になったと感じました。具体的には、金融や経理、また物流にも興味を持つようになりました。二つ目の目的の成果として、世界問題を自分事として捉えられるような活動が出来たと感じている。いままで、画面越し、本越しに見ていた課題が凄く身近に感じられる活動だった。実際に人々と話し、交流を深めることで、その人達の役に立ちたいと思うようになった。また、自分が支援することで、周りにいた現地の人々も少しずつ変わっていく様子を見て、現地で直接支援することの一番のメリット（もしくはデメリットも？）は、直接影響を与えられることではないかと感じた。

● 感想

今回、二つの団体に滞在し、一番感じたのは、開発支援の一番重要な部分は、現地の人々がどれほど自分たちの今の状況を変えたい、より良くなりたいと思っているか、もしくはいかにそう思わせるかなのではないかと感じました。当たり前のことですが、当事者が変わりがた

い、変えたいけど、方法が分からない、という場合において、開発支援を行うことに意味があり、効果が表れてくるものだと、気付きました。今回の渡航において、現地の人々に影響を及ぼす、ということはもちろん、自分にとっても将来につながるような影響力を得た。今後の学業に活かすと同時に、私自身、周りに良い影響を与えられるような人になれるよう、努力したい。

他にも、細かい思い出話はたくさんあるのですが、とりあえず、私にとって確実に価値があったと思えるようなことを書きました。あまりうまく言語化できていないところもありますが、折を見て、課題を自分で深めたり、人に発信して意見をもらえるようにしていきたいと思います。



現地のパブリックスクールにて
(ニヤフルル、ケニア)



現地保育園にて
インタビュー
(ニヤフルル、ケニア)



現地の結納式に参加
浴衣を着つけ、日本文化を紹介
(エンブ、ケニア)